

銃 砲 史 研 究  
第 2 号

銃砲史学会の新しい進路について

火薬は誰が発明したか（別冊）

南坊平造

ポルトガルの東方進出史第二回

有馬成甫

青圃文庫収蔵西洋兵書目録

昭和43年7月

銃 砲 史 学 会 編

# 銃砲史学会の新らしい進路について

御 挨拶  
文学博士 有 馬 成 甫

この岸記念体育館がまだお茶の水にありました頃（オリンピック大会以前）われわれ同好者が集まりました。銃砲の歴史的研究会を毎月開催しておりました。その研究の範囲は狭いものでなく相当広汎に亘りました。

- (一) 日本古流砲術の復元及び保存
  - (二) 古銃砲の保存、その歴史的探求
  - (三) 幕末輸入欧米銃砲の彙集並に沿革史
  - (四) 日本銃砲史の研究及びその特異性
  - (五) 世界銃砲史の研究、並びに日本との関連
  - (六) 幕末維新に於ける争乱と銃砲
  - (七) 日本の近代化と銃砲史
  - (八) 日本古来の文化と銃砲史
  - (九) 明治百年史と銃砲史
- などと、個条を挙げれば沢山ありますが啓蒙運動として実施していますのは、
- (一) 古流砲術の実演
  - (二) 銃砲展覧会の開催
  - (三) 研究論文及び図書の発行

#### 四 日本ライフル射撃協会との関連事業

##### (五) 銃砲雑誌との連携

などに発展して現在に至っております。

然るに幾年か、それ等の研究・事業などを実施して来ましたが経験に依りますと、銃砲史の問題は普通考へられて居りますよりも遙かに広汎重要なものでありまして、例へば明治百年史の問題を觀ましても、銃砲史の占むる割合は更に大きなものと思はれるのであります。

一例を申しますれば明治十三年に村田銃が制定せられました、当時世界の最高水準を示していましたモーゼルの制式によりましたことは、一面に於ては西南戦争の苦い経験の賜物であります。が他面に於てはその結果日清戦役の勝利の因となり、更にその戦役直後設立せられました八幡製鉄所は年々発展しまして、来年富士製鉄所と合併して大戦前の状態に復しますれば、世界第二の大会社となり、また日本の鉄鋼総生産は既にドイツ・フランスを抜きアメリカに次で世界第二の高位を示してあります。

これはホンノ一例に過ぎません。共銃砲と鉄鋼との関係、鉄鋼と文明との関係は実に密接でありまして銃砲史を辿って行けば必然的に近代文明史に至るのであります。

そこで従来銃砲史を技術史の一部門と見ていました角度を拡大しまして近代文明史の中核的な意味として銃砲史に新しい意味を持たしめこれを觀察しますとき、そこには遙かに大きな視野が開かれ、特に十九世紀以来の軍事史、植民史、文明史の核心をなすところのものをそこに発見するのであります。

銃砲史の新しい分野は即ちこの意味でありまして本学会が新しい進路を開拓せんとするのも即ちこの点であります。

それでその一つの試みとしてポルトガルの東方（印度）進出史の問題を採り上げました。

これは世界史としても新しい分野でありまして、何故に白人が東方と言はずまたアメリカ（西方）へも

また濠州へも進出したか、また如何にして進出したか、そうしてそれ迄も幾度か企てられた、例えば元（拔都）のヨーロッパ進出・アレキサンダー大王の印度・波斯征服、及びローマ帝国の発展、などが尽く失敗して今日に至っているのは何故かを明らかに物語るものであります。

そうして白人の征服が何故に成功して世界を一変せしめたか、南北アメリカに於ける白人の征服発展、アメリカに於ける原住民の今日に於ける悲惨な状態などすべて銃砲史の解明に掛かっているのであります。

その上今日は既に新しい時代が拓けています、銃砲や火薬というものより一躍してその爆発の強さが数千、数万倍という破壊力を持つ原子力時代となっています。

一方にこのように科学的進歩が目醒ましいのに、他方これを用ふる人間の心は如何といふに十五・六世紀の頃と少しも変わっていません、その証拠として「ポルトガルの東方進出史」を展示したわけであります。他方これと対照して「ラッセル」法廷正統篇を御覧願います、これが現代に行はれているヴェトナム戦争の現状であります。

それではこの問題を如何にすべきかということが次の課題となります。

この課題に答うるためには教種の考へ方があります、宗教的・哲学的・倫理的：：：等々の方法であります、然しこれらの概念的な思考では政治的には殆んど無力・無効でありましたことは、現実がこれを証明しています。

それでこのような問題を探求するには歴史学的方法でなくてはならないと考へます。

然るに歴史には多く戦争のことが現れます、そうして近代史に於ける戦争に於ては銃砲がその中心をなしています、結局銃砲史を学ばなければ近代史を理解することは出来ないであります。

即ち銃砲史が近代の政治・経済・思想等一切の人間歴史の中核をなします。

茲に私が本学会の新らしい進路と申上げるのはこのことであり、この結果本学会の研究範囲が拡大さ

れなければならぬことは勿論であります、そうして、その性格に於ても地方的局部的でなく世界的一般の  
であり、また科学史を基礎にしたものであることは当然でありけすが、必然的にそれは政治的でなくてはな  
りませぬ。

政治といへば文化史を根本とします、即ちそれは思想史となります。

それで本学会の新らしい進路は近代史に於ける総ての部門に亘る基本的な研究ということになります。そ  
れで一見銃砲史といへば狭い課題のように思はれますが、その内容は近代史の核心的なものでありまして、  
極言すれば銃砲史を窺はなければ近代史は解することが出来ないといえます。この点経済が近代の核心的で  
あるのと同様な関係にあります。

それで銃砲史学会の研究範囲も自然拡大せられあらゆる歴史の部門への研究にも手を拡げなければならぬ  
いことになりました。

これを新らしい本学会の進路として活潑な研究と論議とが交はされ一層の熱意と興味とが注がれんことを  
希望する次第であります。

昭和四十三年六月八日

(終)

有馬成甫

ポルトガルの東方進出史 (其二)

有馬成甫 訳

第一章 ポルトガルの興起

一、ポルトガル王国の成立

ローマ帝国の没落により、イベリア半島に建設された西ゴート王国(四一八〜七三)は、ユーリク王(四六六〜四五)のとき、ローマより完全な独立を克ち得て、トレドを首都として、三百余年に亘る統治を続けたが、七世紀の後半に興ったサラセン人の西進により、七一年に亡ぼされ、コルドヴァを中心とした西サラセン王国の治下に入った。

然し九世紀の初めに北方山嶽地帯に、キリスト教騎士団が興り、レオン・ナヴァル・アラゴン・カスチルの四王国が生まれ、十一世紀の半ばより多少の移動はあつたが、一二三〇年迄にレオンはカスチルに、ナヴァルはアラゴンに合併した。

一四六九年アラゴン王子フェルディナンドとカスチル王女イザベラとの結婚により、一四七四年両者共にカスチラ王位に即き、次で一四七九年カスチラ・アラゴン二王国が合併して、スペイン王国が出来たのである。

ポルトガル王国の成立は、スペインの誕生より数世紀も前のことである。

レオン及びカスチラ王アフォンゾ六世が、ブルガンディー侯フィリップ一世の女を娶り、その援兵を得て

一〇八七年よりムーア人に対し独立戦争を起し、一〇九五年に至り獲得した地方を一団として、政治中心をドウロ (Douro) の北、ギマラン (Guimarães) に置き、そうして自らの称号をポルトラス・カール (Portus Cale) 侯と呼んだ。この町はドウロ即ち今のオポルト (Oporto) の入口の港町で、フィニキア時代から貿易港として知られた重要な地点であった、後のポルトガルという国名は、このポルトラス・カールの町名から転化したものである。

アフオンゾ六世の後は、その女テレシアと結婚したブルグンド公ヘンリーの子ポルトガル伯ヘンリーが継ぎ、その子ドム・アフオンゾ・ヘンリー (一二三九〜一二八五) に至って国王の位に即いた。

彼はムーア人の掃蕩に力を尽し、一一三九年六月二十九日のオウリック (Ourique) の戦いで、決定的な勝利を獲得、一一四七年三月十五日リスボンより四〇マイルの地点にある要塞地サンタレム (Santarém) を占領し、ポルトガル王国を建てその初代国王となり、アフオンゾ一世と称した。

彼はムーア人が占拠しているリスボンを奪取しようと思ひ、折からターグス河口 (Tagus) に碇泊し十字軍の前線に向はんとしていた英国艦隊の援助を得て攻撃を開始し、一一五八年六月二十八日これを占領した。

リスボンは古い名のオリシポ (Olisipo) またはウリシポ (Ulyssipo) とシウフェニキヤ語から来てる、ヒポとは要塞 (壁で囲んだ場所) のことで、ウリシポはウリセス (Ulysses) という人が作った城壁の町という意味である。ローマ時代は地方区 (Municipium) が置かれたが、ゴート人に次いでサラセン人が主権者となつてからは、アラビヤ語でラッシュビユナ (Lashbuna) またはオッシュブナ (Oshbuna) と呼ばれ、その頃から特に絹織物工業が盛んであった。

アフオンゾ一世は、リスボン占領後首都をここに移し、積極的に統治に努めたので、ローマ法皇アレキサンダー三世 (一一五九〜八一) から国王として法規上の権威を確認する旨の \* 大勅書 (Papal Bull) が与へられた、これはスペインの成立 (一四七九) より三百余年も前のことであつた。

\*ローマ教皇の印 (Patria) が押しである公式のもので、大勅書・教書・回勅などと訳せられている。

彼の統治下のポルトガル王国は、現在の六州ではなく、四州であったが、彼の死後その子サンチヨ一世が継ぎ、その後をアフォンソ二世・アフォンソ三世 (一三二七―一三九九) が承けてドム・デイニッツ (Diniz) に至つて領土を拡張し、六州となった。

彼はポルトガル最初の海軍を建設し、その最初の司令官には、ゼノア人のマノエルベッサニヤ (Manoel Pessanha) を任命した。

デイニッツの子はアフォンソ四世 (一三五五―一三五七) その子はドム・ベドロ一世 (一三五七―一三六七) であつた。彼は英国との間に友好関係を保ち、一三五二年英国王エドワード三世 (一三二七―一三七七) と協定を結び、英国はポルトガル人に対し危害を与へないと宣言した。

ベドロの子フェルディナンド一世 (一三六七―一三八三) は、英国の後援を得てカスチルと競争し、戦争状態が続いた。その子ヨアン一世 (一三八五―一四三三) は一三八七年二月二日英国のジョン・ガント (ランカスター) 侯 (John of Gant) の娘フィリップ (Philippa of Lancaster) と結婚した。彼の永い統治期間には平和の時代が続いた。

ポルトガルの商業的活動は、ヨアン一世の子ドム・ヘンリックの研究に俟つところが多い。

## 二、ドム・ヘンリック

エンリケと呼ぶ

ドム・ヘンリック (Dom Henrique 一三九四―一四六〇) は、ポルトガル王エドワード (一四三三―一四三八) の皇弟・英国王エドワード三世 (一三二七―一三七七) の孫、ヘンリー四世 (一三九九―一四一三) の甥であつた。一般には彼は航海者 (Navigator) の名を以て呼ばれている。

彼は二十一歳のとき、その兄弟ドム・デュアルテ及びドム・ベドロと共に、父王ヨアン一世に従つてセウ

タ (Cauto) 攻撃に参加し、苦戦の後これを占領したので王は三人の王子に対し、戦場に於て騎士の爵を授けた。

ドム・ベドロはコインブラ侯、ヘンリックはヴィセウ侯 (Duke of Viseu) を称することとなった。これがポルトガルに於て侯爵を授けられた初である。

この戦役 (一四一五) には、英・仏・独其他各国から有名な人々が参加したため、ヘンリックの名も広く知られるようになった。彼は法皇・独乙皇帝・カスチル王及び英国王などから招待を受け、それらの国々の軍隊の指揮官に任ぜられたが、彼はギニアへの進出を考えていたので、それらの国々を訪問することをしなかつた。

そうして専ら探險隊派遣の事業に身を投じた。

其頃ノン岬 (Capo. Noe) (アフリカ西岸) は、当時カスチルの探險船が達した最南端の地点であつたから彼はそれを越えて南に船を派遣したいと思つてゐた。

当時東方貿易は全くムアール人の手に握られていたので、印度の物資はスペイン地方に氾濫しセヴィル及びグラナダのナラセン王の豪華振りはアラゴン・カスチル王室の羨望の的となつてゐた。

その上十字軍に参加して中東地方に行き、所謂東方の榮華を實見したものは、大きな刺戟を受けて帰つて来た。それでイベリア半島よりサラセン人を駆逐することは結局それらの東方物資の流入を遮断することになるので、ヘンリックはそれに代る方法として、海上より印度へ達する航路を拓かんとしたのである。

ドム・ヘンリックはヴィセウ侯の授爵と共にキリスト教団総裁 (Master of the Order of Christ) 及びアルガルヴェス王国知事 (Governor of the Kingdom of Algarves) の職に任ぜられた。そうして前者の職から莫大な収入が入るようになったので、印度貿易航路開究の研究に、後生を投ずる決心をした。そうして新居をアルガルヴェのサーグル岬上に定め、常に大西洋を望んで暮らした。初めこの別荘をテルサ・

ナバン (Terça Nabal & Terceira Nabal) と呼び、後にアンファンテ別荘 (Villa de Infante) と呼んだ。

そこで彼は天文学や数学などを学び、またアフリカに於けるムアー人の交通貿易に関する情報を集め、また毎年数隻の船舶を用意して探険隊として派遣した。

彼の弟ドム・ベドロはヘンリックの感化を受け、自ら東方及びヨーロッパ各国を視察せんと欲して、一四一六年にリスボンを出発し、先づパレスティンに行き聖地を巡礼し、トルコ王やバビロニアのサルタンを訪問して歓迎を受け、それよりローマに至って法皇に謁しマーチナス五世 (一四一七—一四三一) からポルトガル王の爲めに特権を授けられ、英国王、フランス王と同じく戴冠式を受ける権利を贈られた。

それよりハンガリア及びデムマーク王を訪ね次でヴェニスに行きヴェネチア共和国よりマルコ・ポーロの旅行記、及びポーロが作製した地図を贈られた、これは非常に価値あるものと思はれていた。

それから英国に行きヘンリー六世王 (一四二二—一四六一) から欲待を受け一四二七年四月二十二日にガーター勳章佩授者 (Knight of the Garter) に叙せられた。そうして彼は十二年の永い旅行を終えて一四二八年にリスボンに帰った。

この頃ポルトガルと英国との間の貿易は盛んになり、英国船はリスボンに集り、酒 (葡萄酒) ・ワックス・穀物・無花果・乾葡萄・蜂蜜・馬革・ナツメ果・塩・牛皮等が取引されていた。

一四一八年より一四二〇年に亘り発見されたポルト・サント島 (Porto Santo I. 北緯三三度二分、西経一六度二〇分) 及びマデイラ島 (Madeira I. 北緯三二度四分、西経一七度〇分) は、ヘンリックの派遣した探険隊の発見したものであり、また一四三四年に派遣したギル・オアネス (Gil Eanes) は、ノン岬を越えてボジャドール岬 (Cabo Bojador 北緯二六度三〇分、西経一四度〇分) に達した。

一四四一年にヘンリックは、アフリカ沿岸の異教徒と戦う為の遠征隊を派遣する計画をローマ法皇に報告

し、ポジャドール岬から南へ印度に至る間に発見する土地の全部を永久にポルトガル王位に譲与せられんことを乞い、特にこの征服の努力の主目的は、その地の住民への伝道（布教）にあるから、これをポルトガル王に委任せられんことを求めた。

この報告はローマ法皇及び枢機卿会議から非常に価値あるものと認められ法皇ニコラウス五世（一四七〇—一四五五）及びシクタス四世（一四七一—一四八四）からその要求に応じてそれぞれ大勅書（ブリエ）が発せられた。当時摂政の職にあつたドム・ベドロは、これによってヘンリックに対し探險・航海・貿易の独専権を与へ、また王室が関係する遠征事業より得られる果実の五分の一を取得することを許し、またヘンリックが自力を以て行ふ探險事業の費用と努力とに対し、独占権を確保するため、ヘンリック侯の発行する航海許可証を持つ者か、または特に命令を受けたるもの外は、何人と雖も遠征に行くことを許さぬという勅令が發布せられた。

ヘンリックのアフリカ土人改宗方法は之を捕へ来つてポルトガル社会の風習に馴染せるといふに<sup>し</sup>あつた。それで派遣する船の指揮官には土人を捕えて帰れと命令された。

当時の年代記者アズラは、その目撃者の一人であつたが、その記する所によれば、それらの土人捕虜は、良く待遇せられ、普通の自由民の下僕と同様に愛せられ、または親切に取扱はれたとある。然しこれは事実の半面のみを見たのである。

アフリカ貿易は、主として奴隷の売買と砂金の獲得とであつて、これから得らるる利益は、ポルトガル人の貧慾心を満足せしめ、またこれを得んとする心をそるものであつた。

国民も初めは、このような企はあまりに費用がかかり過ぎると反対していたが、その利益の多いことを知ると、やがてポルトガル国旗の下に加はつて分け前に与かろうとする熱が、ヨーロッパを風靡するようになった。

一四四三年にラゴス (Lagoa) の一商社がヘンリックより期限付で、アフリカのムアー人との間の貿易免許を受け、アフリカ商會 (Royal African Company) の名の下に、数隻の船を機装して派遣した。

船はノン岬より南へ下り、ナル島 (Narh) という小さな島に達したが、ムーア人と取引しようとはせず、急に彼等を攻撃して、多数の人を殺し、百五十五人の黒人奴隸を補えて帰つて来た。

ヘンリックはこのことを聞き、土人の復讐に備へ根拠地を作るためナル島の附近のアルギン島 (Arguin) 北緯二〇度四〇分、西経一六度三〇分) に小さな要塞を築き会社の利用に充てたが、会社はここに商館 (factory) を建て、毎年船にて毛織物・麻布・銀・穀類などを送りこれと引換に黒人奴隸・砂金を持ち帰った。

ヘンリックは十五世紀の初めからカナリー群島の領有を思っていたが、然しこの群島はカスチル王の派遣したノルマン人ジャン・デ・ベシユクールト (Jean de Bethencourt) が発見征服したもので王が彼に帰属 (homage) を与へたものであった。

然し兩國は、各その主張を枉げず、その領有権を争い続けていたが一四七九年九月四日、ポルトガル王アフォンズ五世とフェルディナンド及びイザベラとの間に平和協約が結ばれた。その中の一条に

ノン岬から印度に至る海上、及び附近の島で征服したものは、総てポルトガルの領有に帰すべく、然しカナリー島及びグラナダ島はカスチル人の所屬として残さるべし。

とあつて、これが調印せられた。

一四四〇年ドム・ヘンリックの探險隊はアゾレス群島 (Azores Is. 北緯三八度〇分、西経三〇度〇分) を発見し、一四四五年より一四五六年にかけヘンリックの事業についていたヴェネチア人ルイジ・カダモスト (Luigi Cadamosto) は、カボ・デ・ウエルデ群島 (Copa de Verde Is. 北緯一六度三〇分、西経二〇度〇分) を発見しセネガル (Senegal) ガンビア (Gambia) 及びリオ・グランデ川 (Rio Grande) などを探

険して帰つて来た。

ドム・ヘンリック航海者は、一四六〇年十一月十三日に永眠した。それで彼は、自らの計画の結果を総て見ることは出来なかつた。

彼はラゴスのサン・マリノ教会に葬られたが、後遺体はサンク・マリア・デ・バトルハ (Santa Maria de Batalha) 教会に移され、今その処に墓がある。碑には有名な波の標語

“Talent de Bien faire” (善行への才能)

という語が刻まれてゐる。

X X X X X X X

アフォンゾ五世 (一四三八—一四八一) は、叔父ヘンリックの計画に随つて探險を行はんと欲して、彼が残した世界地図を入手した。これはヴェネチア人フラ・マウロ (Fra Mauro) が三年の日々を費して作製したものであるが、それにはヴァスコ・ダ・ガマが希望岬を廻つて印度に行つたよりも、四十年前に既にその岬を “Cavo di Diab” の名を以て書き込んであり、またその東北方に “Safala” 及び “Xengibar” (サシバール) の地名も見えているから、これは明らかにアラビヤ人より得たる知識によつたものである。

一四六一年より翌年にかけて王がベドロ・デ・シントラ (Pedro de Oñtra) の指揮下に派遣した二隻の武装カラヴェル船は、シュラ・レオン (Serra Leone) 及びその南方若干マイルの海岸を発見した。

一四六九年には、王はアフリカ海岸の貿易をフェルナン・ゴメズ (Fernao Gomez) に五年間貸下げ、毎年五百クルサドスを王室に収めること、象牙貿易は王室のためのみに行ふこと、毎年百リーグ宛発見すること、探險はシエラ・レオンより初めること、などが条件として附せられていた。

フェルナン・ゴメズは、この探險中一四七一年に初めて赤道を北より南に通過し、南緯二度のセント・カタリン岬 (Capo St. Catherine) に達した。

(未完)

青圃文庫収蔵西洋兵学書目録

青圃文庫は会長有馬成甫博士が大正年中より戦前まで苦心蒐集された兵学書を中心とし、戦後は博士の指導の下に編者とその業を継ぎ漸次その充実に勤めているもので、わが国においては特色ある文庫である。

目録内容は幕末から明治初年にかけての翻訳兵書が主であるが、原書ならびに西洋兵学の影響を受けたと見られる邦著も含まれる。

また西洋兵学修得の基礎となった理学書、技術書、測量書、地誌その他多少なりとも軍事に関係あるものは全て本目録に掲載した。しかし和流砲術のようにその源をヨーロッパにあれど日本兵学書目録に収載されたいものもある。

本目録の作成は有馬成甫著「西洋軍事科学翻訳書目録解題」(未刊)を参照するところが多かった。

所 在 吉 編

砲 術

一	砲術訓蒙	一二卷	一冊	木村軍太郎	訳	安政元年刊
二	砲術訓蒙	一二卷	八冊	杉田成郷	訳	安政五年刊
三	砲術訓蒙排夢録		一冊			写
四	六版 煥氏砲論	一二卷	七冊	内藤類次郎	訳	慶応二年刊

二四	海軍輕砲教練	三卷	一冊	慶応元年写
二三	海岸備要	四卷	五冊	嘉永五年刊
二二	砲術備要	四卷	二冊	文化五年写
二一	新撰発煩明鑑目錄		一冊	文化五年写
二〇	大砲放発術	(三篇 四篇欠) (下卷欠)	一冊	文化六年写
一九	ボスンギーテレイ・コンスト訳		二冊	文化六年写
一八	雨玉国字解		一冊	文化六年写
一七	和蘭神器秘録		二冊	文化六年写
一六	和蘭砲具図説	初篇	一冊	安政元年刊
一五	遠西火攻精撰撮要	一	一冊	嘉永七年刊
一四	遠西火工其精大全	一二卷	一三冊	天保一二年写
一三	速西火攻精撰	一二卷	一三冊	天保一二年写
一二	速西軍艦砲要	三卷	一冊	天保十年写
一一	英吉利巨砲新書		一冊	写
一〇	アルチルレリー訳文		一冊	写
九	アルムストロング新砲図説		一冊	元治元年刊
八	砲家日新		一冊	慶応四年刊
七	砲家須知		一冊	安政三年刊
六	火攻式		一冊	慶応二年刊
五	砲術新篇	一二卷	八冊	慶応元年刊

二五	海軍要略	二卷	五冊	鹿田方明	嘉永二年写
二六	百幾撒私	四卷	三冊	小山杉溪	嘉永七年写
二七	百幾撒私	四卷	四冊	小山杉溪	安政二年刊
二八	百幾山斯經驗書	六卷	三冊	写	安政二年刊
二九	盆籠葛農	四卷	一冊	杉田成郷等	嘉永六年写
三〇	海上砲術全書	二八卷	六冊	杉田成郷等	天保一四年写
三一	海上砲術全書	二八卷	一五冊	杉田成郷等	安政元年刊
三二	海上砲具全図	二卷	一冊	平涯	安政元年刊
三三	火攻技範	二卷	二冊	榊令輔	安政元年刊
三四	火攻全書図	二卷	一冊	榊令輔	安政二年刊
三五	火攻採要	二卷	一冊	榊令輔	嘉永七年刊
三六	火攻図略附録解	二卷	一冊	川勝泰運	嘉永七年写
三七	弁鳴琴原講義	中卷	一冊	川勝泰運	安政二年写
三八	規賀射擲表	中卷	一冊	伊藤祐磨	慶応元年刊
三九	鈴林必携	三卷	二冊	上田亮章	嘉永二年刊
四〇	鈴林必携	三卷	二冊	上田亮章	嘉永五年刊
四一	鈴林必携	三卷	二冊	上田亮章	嘉永六年刊
四二	煩砲用法	三卷	三冊	杉田成郷	弘化四年写
四三	煩砲射擲表	三卷	一冊	大家同庵	嘉永五年刊
四四	煩砲射擲表	三卷	一冊	若山勝長	嘉永六年刊

四五	增補煩砲射擲表		冊	大家同庵	嘉永五年刊
四六	射擲試効表		冊	掬花園主人	安政三年刊
四七	新砲操練		冊	小幡甚三郎	明治三年刊
四八	新砲二種射擲表		冊	早崎哲意	文久三年刊
四九	信管表		冊		文久三年刊
五〇	舶來諸砲図	七枚	帙		天保一四年写
五一	信管截断表		冊	田中由豫	安政六年刊
五二	西洋火筒放発論		冊	石橋助左衛門	文化五年写
五三	西洋流奧儀大鑑	二卷	冊		弘化元年写
五四	西洋砲術表之卷		冊	上田仲敏	安政元年写
五五	西洋砲術書		冊	佐久間象山	安政元年写
五六	西洋砲試放記録		冊	柏木兵衛	安政六年写
五七	施条砲射擲表		冊	池部常春	文久二年刊
五八	施条砲図説		冊	吉村真美	元治元年刊
五九	施条砲操法(砲軍操法補)		冊	吉村真美	元治元年刊
六〇	西洋諸砲図		冊		天保一四年写
六一	西洋戰隊銃砲略標		冊		天保一四年写
六二	榮土勿言	(首卷)	冊	田結莊千里	嘉永七年刊
六三	大西砲術輯要	(一二欠)	冊		天保一三年写
六四	泰西王氏銃譜 大銃篇		冊	竹内秀明	嘉永六年刊

六五	高島流砲術秘書	三卷	三冊	高島秋帆著	弘化四年写
六六	高島流砲術秘書	三卷	三冊	高島秋帆著	文久三年写
六七	西說火攻弁略	七卷	七冊	写	嘉永五年写
六八	大砲機械	(下卷欠)	一冊	堀德政	安政四年写
六九	大砲使用說	(下卷欠)	一冊	堀德政	安政四年写
七〇	大砲使用軌範	(下卷欠)	三冊	寺地強平	安政四年写
七一	東西火攻弁	三卷	五冊	佐藤信淵著	嘉永元年写
七二	動重学彈道論		一冊	河野為大著	明治一七年刊
七三	廿四斤憂炳砲使用法		一冊	藤井質	弘化四年写
七四	船砲新編	一一卷	一六冊	川崎七郎	明治二年刊
七五	仏蘭西四斤山砲伝習録		一冊	池部啓太著	慶応四年刊
七六	仏米二砲射擲表		一冊	池部春常著	慶応四年刊
七七	仏式施条砲射擲表		一冊	岡内章	文政一二年写
七八	砲術基礎	三卷	一冊	岡内章	文政一二年写
七九	西洋砲術便覧	二卷	二冊	上田仲敏	嘉永六年刊
八〇	西洋砲術便覧	二卷	一冊	上田仲敏	嘉永六年刊
八一	砲術発揮	一〇卷	三冊	写	嘉永元年写
八二	砲術附图		一冊	写	嘉永元年写
八三	天保一四年癸卯六月舶来大銃図		一冊	写	天保一四年写
八四	砲術小学前編	二卷附图	三冊	市川逸吉	明治三年刊

一〇四	一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	九九	九八	九七	九六	九五	九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	八五
砲台用砲節制	洋砲試驗表	洋外砲具全図	洋外砲具全図	砲術教授書	砲制制篇	砲煩射放論	砲學通志	砲科新論	砲術玉道真法	砲術矢位算法	砲術彈道書	砲術彈道書	砲術彈道總論	砲術矢位測量階梯	砲家剖記	砲家袖珍	砲家必読	砲家必読	砲學図編
																			初篇
二卷		二卷		二卷			四卷										一一卷	二卷	
二冊	一冊	二冊	一冊	二冊	一冊	一冊	四冊	九冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	二枚	五冊附図一	二冊	一冊
石河	杉田	鈴木	鈴木				関	大鳥	小出	池部	池部	池部	池部	池部		吉田	大島	大島	佐久間
確太郎	成郷	昭立	昭立				讀蔵	圭介	長十郎	啓太	啓太	啓太	啓太	啓太		義直	興	興	象山
安政六年刊	嘉永七年刊	嘉永七年刊	嘉永七年刊	明治六年刊	安政四年写	安政四年刊	文久元年刊	弘化三年写	弘化元年写	安政三年写	天保五年写	天保五年写	天保四年写	安政元年写	慶応元年刊	安政三年刊	安政三年刊	嘉永四年刊	嘉永四年刊

一〇五	用砲軌範砲台篇		一冊	武田成章	嘉永五年	写
一〇六	雷砲射擲表		一冊	麻生敬之介	明治元年	刊
一〇七	烙丸明弁	三卷	一冊	坪井良	嘉永元年	写
一〇八	烙丸明弁	一二卷	一〇冊	名村元義	安政二年	写
一〇九	陸砲発蒙	一一卷	一冊	佐藤信淵	文化七年	写
一一〇	蘭法船戦火砲秘抄	三卷	三冊	佐藤信淵	文化七年	写
一一一	三銃用法論	三卷	一冊	佐藤信淵	文化七年	写
一一二	三銃用法論	四卷	一冊	佐藤信淵	文化七年	写
一一三	大円流三銃用法論		四冊	佐藤信淵	文政五年	写
一一四	大円流深秘録		二冊	平山子竜	享和二年	刊
一一五	西洋火攻神器説		一冊	荻生徂来	享和二年	写
一一六	西洋火器説		一冊	清水正徳	享和二年	写
一一七	西洋火器解		二冊	伊達賢	嘉永六年	写
一一八	砲術新論		一冊			
一一九	西洋流砲家要録		一冊			
一二〇	西洋流砲弾名義解		一冊			
一二一	西洋流砲家秘函卷		一冊			
一二二	西洋流諸彈丸		一冊			
一二三	西洋流砲術印可状		一冊			
一二四	七一・アルチルレリ		一冊			

一四四	砲術姿製撮要			冊	熊坂蘭齋	安政三年刊
一四三	砲術言葉			冊		嘉永元年刊
一四二	歩兵心得			冊	大築保太郎	元治元年刊
一四一	電擊銃略記			冊	小山杉溪	嘉永三年写
一四〇	西洋操銃篇雷火銃小解	二卷		冊		安政三年刊
一三九	新銃射放論			冊	赤松清次郎	安政四年刊
一三八	小銃射論			冊		安政四年写
一三七	新流鉄砲解き方			枚		安政四年刊
一三六	小銃部分名称			折		安政四年刊
一三五	習銃用法			冊	阿部質	安政五年写
一三四	劍附筒評論			冊		写
一三三	雷粉砲考	二卷		冊	吉雄常三	写
一三二	粉砲考			冊	吉雄常三	天保一四刊
一三一	皇国火攻神努図説	二卷		冊	竹内秀明	安政七年刊
一三〇	火箭新論	三卷		冊		写
一二九	練煩手法	二卷		冊		写
一二八	紅毛火術録	二卷附録		冊	鮎川竹編	享保一二年写
一二七	魯西垂舶砲図			冊		写
一二六	砲機図解			冊		写
一二五	遠西武器図略			冊		嘉永六年刊

一四五	村田銃取扱法	冊		明治一五年刊
一四六	村田銃保存法	冊		明治二〇年刊
一四七	村田銃取扱法特別注意	冊		明治三年刊
一四八	小銃矢ごろのかね	冊	赤松清次郎 訳	安政五年刊
一四九	雷銃操法	冊	福沢諭吉 訳	慶応二年刊
一五〇	歩兵使用雷銃新書	冊	金森錦謙 訳	安政三年刊
一五一	雷火銃小解	冊	東条実 訳	安政二年写
一五二	小銃略解	折	山脇正民 編	安政二年刊
一五三	銃工便覧	冊	林潤暉 編	安政三年刊
一五四	拳銃使用法	冊		明治一八年刊
一五五	隨機備用方初篇	冊	竹内秀明 著	安政五年写
一五六	雷銃操法	冊	福沢諭吉 訳	慶応二年複刻
一五七	射銃通論	冊	臼井客胤 訳	安政四年写
一五八	射的教程第一版	冊		明治一五年刊
三卷				

六月例会出席者（署名順敬語称略）

- ◎有馬成甫 高井稔次郎 菅野陽  
○安齊実 〇所 莊吉 〇白鳥守人  
小島駿吉 宮坂善助 〇宗京獎三  
荻原博志 稻田正純 新見政一  
桜井成元 萩原和雄 〇小橋良夫  
渡辺操 〇森重民造 阿南惟敬  
〇伊藤稔弥 高橋邦太郎 〇吉岡新一

〇岩寺憲二

銃砲史研究 第二号

昭和四十三年七月六日 発行

銃砲史学会編集 発行

東京都渋谷区神南町二十五

日本ライフル射撃協会内

頒価 百五十円